
とある男と伝説への道～幻想と俺と異世界と～

なつや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある男と伝説への道〜幻想と俺と異世界と〜

【Nコード】

N5647J

【作者名】

なつや

【あらすじ】

獄普通の一般人であった俺は神様を名乗る存在の依頼によって、世界の破滅を防ぐ為に異世界で最高のハッピーエンドを得る為に旅立つことになった！

神様には色々細かい事を言われたけど、俺が目指すはとりあえずハッピーエンド！まあ誰だってバッドエンドは嫌だしな、全力で取り掛かって大手を振ってもこの世界に戻ってやるぜ！

これは後に異世界で伝説となる男の記録である！……………多分。

※本作品はネタです。まじめな武装紳士にはお勧めできませんのでご注意ください。

行動記録00：異世界へ〜g d g dな物語の始まり〜（前書き）

※本作品はネタです。武装神姫目当ての武装紳士諸兄には申し訳なさ過ぎるのですがお勧めできません。

どうぞ回れ右して別の方の見応えある物語に没頭してください。

なお神姫の登場は次話以降の予定となっています。

行動記録00：異世界へ〜ggdな物語の始まり〜

有り得ない程に危険地帯と化した関東のとあるのベッドタウンから
ここにちわ。

俺の名前は鎌田佳佑、かまだ・よしひろ割とオタクが入っている極普通のサラリーマン（24歳）精神年齢は少年ガキという自覚ありだ。

ちなみに、初見の人が俺の名前を読もうとするとほぼ確実にケイスケと呼ばれるのが多いのでそっちでも反応したりする。なれてるから。

ところで此処最近、この街では異常事態が日常と化している。

曰く、ゲームに出てくるような化け物の幻影が見えた。

曰く、神の啓示を受けた、アイツを殺さねばならなかった。

曰く、目の前に居た人間が何の前触れもなく消滅した。

曰く、車による人身事故やらなんやらが非常に多発している。

曰く……この世界を救う為に異世界で力を磨き上げ、そして戻ってきてこの世界を救って欲しいだとか。

曰く、既にもう何人も異世界に旅立っているだとか。

そういった情報を、俺はTVのニュースや目の前の何かから今聞かされた。

なんでも、自称『この世界の神』らしい人物だ。

キリスト教の信者って訳でもないが、てっきり神様ってのはなにやら神々しい雰囲気を持つオッサンかジジイだと思ってた。

ちなみにその思考が読まれたらしく、それは自分より大分前の前任者だ、と抗議された。

……とりあえず有り得ないだろう、常識的に考えて。突っ込みどころが多すぎる。

幾ら俺がゲーム好きで休みの日はギャルゲ攻略や趣味のプラモやフイギュアの製作に勤しんだり、積んでるラノベやネット小説の消化に勤しむ様なオタク系だからって、それはないだろう。確かにこういう展開にはオタクとして懂れるものがあるけどやっぱりないだろう、一般常識的に考えて。

「ですが、事実です。

そして既に此処は…この世界は常識が失われ破綻しかかっているのです」

話がでかすぎる、ドッキリにはありえないスケールだ。

そもそも世界を救うのに必要なのが『想像力』って辺りどうなのよ？

「正確には『創造力』なのですが…」

イントネーションが違うようだけど気にしない。

「話していても埒があきませんね。

申し訳ありませんが強制執行させていただきます」

そう言って自称神様は手を俺に突き出して強烈な光を放つ。

「うおっ!?!まぶしっ!?!」

コレが俺の生まれた世界での最後の言葉だった。

寝ている時のとてもリラックスできる穏やかな感覚。

それが俺の全身を包んでいた。

『さて、他の人達には時間的余裕がなかったのですが貴方にはまだ時間的余裕があるので説明をさせていただきます。

先ず、貴方が向かう先の世界は下位世界：と私達は呼称しています。

私たちが管理し、貴方が住んでいた世界はその世界から見ると上位世界となります』

下位世界？上位世界？

『言ってしまうえば、下位世界は物語の世界、の様な物です。勿論、それはあくまで例えですけどね。

下位世界には実際にあなた方人間が夢想した世界、いわば創作上つくりものの世界も存在します。

貴方が向かう世界はそれらに似て非なる世界。

いわゆるファンタジー系小説などで出てくるような世界となります』

ああ、なんかどっかで聞いた展開だ。

あれか『現実↓異世界』モノのネット小説みたいなあんな感じ？

『見も蓋もないですがその様な形です』

ってか、神様ってそういうのも知ってるもんなのか？

『神様といっても代替わりする前は普通の高校生でしたから』

……………ありえねえー。

普通の高校生を神様にするって…。

『それはともかく、転移後に貴方が持つ全てを説明します。

まず、所有品はあのアパート一室全て。

ただし電気・ガス・水道はなくなってしまうのでそれらが必要なモノは無用の長物になる事を覚悟してください。

次に上位世界存在の特権について。

その一、上位世界存在は一応は不老不死です。

ただし不死だからと言ってダメージを受けないわけではありません。

普通にダメージは受けます。ただ死んでもその後復活することできます、と言うことです。

アレですね、古き良きゲームの『お勇者よ死んでしまおうとは情けない』みたいな感じですよ。別に貴方は勇者って訳ではありませんけど。

で、死んで直ぐに復活できる訳ではなくて、肉体ダメージレベル、及び精神ダメージレベルによって復活に掛かる時間は変わっていきます。

この辺りは具体的にどれぐらいとは言えませんが、人それぞれになります。

数秒後に復活する事であれば、数世紀後に復活する事もあります。アレですね、どっかの宗教の復活予言みたいなそんな感じですよ』

なんだか、今すっぱーその道の人に喧嘩を売ってそんな事を言っていたが、とりあえずスルーするのが大人だな。

『その二、素敵アイテムの供与です。

Compの愛称で親しまれる汎用腕部装着型端末機構。

様々な世界のネットワークや同じ上位世界存在が得た知識や情報、技術は次元ネットワークを通じてwikiに登録されます。

それを通じて色々と情報共有が出来る様になっています。

つまり、時間と労力さえ考えなければ好き勝手やり放題って訳です。

ちなみにサーバーの費用は全部私持ちです、時々サーバー維持費の協力があると泣いて喜びますので宜しく。

費用はどの世界の通貨でも構いません。こっちで勝手に換金しますから。

後、他にも機能はあるけど、そちらは自分で追々確認してください』

サーバー維持費って…神様の癖にそんなのも払わなきゃいけないのか？

『便利な技術は結局お金がかかるのよ。』

まあ、貴方達が異世界で善い活躍すればするほど私の方にも収入が入るから特別きつい訳でもないわ』

そうなるって俺達ってまるで派遣社員だな。

『まあ、似たような物ね』

所で、お約束だと他にも何か特殊な能力とか道具とかってくるものだと思うんだけど。

『Compでも十分特別なんだけどね…まあ良いわ。』

約一名を除いてとんでもなく素晴らしい武器や道具や能力を他にも与えてたりするし、貴方には…そうね、能力を与えておくわ』

約一名を除いてって…その不幸なやつはどんな状況だったんだ？

『私の与えた武器や道具を何も持たないまま下位世界にいつてしまったの。』

まあ、正直な話：私達の世界の敵とも言える存在からの横槍なんだけれどね』

ちよつとまで、敵とか居るのか。

『殆ど気にしなくても良いんだけどね、敵の名前は集合無意識ってヤツよ。』

つまり、世界に存在する物たちの無意識が私の邪魔をしているって訳。

何でかって言うと『強烈な自殺願望』とでも言うべきかしらね。

まあ、所謂人々の不安や絶望って言うの？ そういったものが多いとなると色々と世界に悪影響が出るのよ。

コレからどんどん『悪くなっていく世界を創造してしまう』って感じにね』

悪くなつてく世界を創造する？

『例えば、環境の問題とか、人心の荒廃とか、経済の悪化とか……まあ、そんな感じね。』

そしてそれが窮まった時、世界はその世界に存在するモノの『世界が滅ぶという創造の力』によって滅ぶ。

これが典型的な世界の滅びのパターンよ』

んー、例えばどこぞの魔砲少女アニメに出てくるロストうんちゃら見たいな危険物で滅ぶとか？

『そういう『滅びの創造』が強ければそうなると思うわ』

ってーか、さっきから言葉遣い崩れてきてない？

『気にしないで、こっちが素だから』

そうかい。

所で……だ。

俺、そもそも異世界に渡って何をすればいいのさ？

『簡単に言えば、とにかく生き抜けば良いのよ。

目標が欲しければ英雄を目指すのもいいかもしれないわね。

基本的に、貴方達が向かう世界って何らかの要因で世界的な危機に見舞われる可能性が非常に高い世界なの。

そしてその危機を救う為に下位世界存在よりも根本的に強烈な存在の力を持つ上位世界存在を派遣して問題を解決する。

救う方法は色々あるわ。

先ず、私達の世界の様に人々が抱いた『滅びの創造』を打ち砕く事。

例えば、それが『魔王』という分かり易い敵であるなら自分で打倒してもいいし、人々を先導して立ち向かわせる力を与えるという形でも良い。

人同士が滅ぼしあう世界なら自分が先導となって導くのも良いし、滅ぼしあう原因を排除するでも良い。

君達の役目はね『伝説』を作る事。

それもできうる限り『最高のハッピーエンド』という物を。

まあ、どのみち貴方達は世界から見て特異点なの。

特異点は強いて言うならばトラブルに出会いやすい体質のような物よ。

そうね、例えば頼んでも居ないのに絶世の美女や美男子、最強とか天才とか呼ばれる奴らに付きまとわれて好意を抱かれたり』

おい…。

『ちょっと躓いたりした瞬間に暗殺者の攻撃を回避したり、バランス崩すのと同時に運よく？ 打撃を加えたり』

待て…。

『何気なく言ってみた言葉が強すぎる言霊になっていわゆる『OS EKKYOU』になってたり』

なんだそれは、本気でゲームかラノベか二次創作小説の主人公かよ。

『似たようなもんよ。ちなみに私がただの人間やってた頃は中世ファンタジーな世界に呼び出された最強の聖女様（笑）だったわ。

向こうで政略とかなんとかで貞操狙われてたから用事済ませて帰還に必要な力を得た瞬間にコッチに帰ってきたって訳』

そういえば、コッチに帰ってくる方法ってどうすればいいんだ？

『私が送り出した場合はある程度以上の『創造力』を得て、帰還を願えばいいんだけど…。

『滅びの創造』に世界から追い出された場合は自らの力で世界の壁を乗り越えなければいけないわ。

まあ、実際にそういった感じで世界から追い出されたのって始めに言った不幸な子だけなんだけど…』

そいつ、悲しいぐらいに運がないなあ。

『彼が『滅びの創造』に弾き出されなかったら、私も対処に出るの

が今以上に遅れる所だったわ。

でも実際、私の行動が遅すぎたのは事実ね。

私が防ぐ前に何人も候補者が殺されてしまっているわ。

そういった人たちは魂だけ保護して異世界で転生してもらっているの』

異世界で？

『そう、異世界で。

ただ、誰がどこに行くかは本当にランダムで、知り合いに合える可能性なんて殆ど0%よ。

私にだってその辺りは調整できないの。

ただ、同じ下位世界群ではあるから、世界を渡る方法さえ見つければ会う可能性もあるかもしれないわ。

時代と地域さえ一致すれば』

なるほどそれ故に限りなく0%か、納得。

あ、そういえば。

『なにかしら？』

俺の特殊能力って何？

『そうね……強いて言うなら『創造する力』かしら。

ただ、始めのうちはそうね、例えばオモチャの銃を本物の銃にしたり、お人形を人間の従者に変えたりっていう事が出来るかしら。

そうね、カッコよく幻想ユメを現実ホンモノに変換する力『幻想変換』って名づけようかしら、ある意味その方が本質に近いし…。

能力の方は考えやすく言えばMPとかそういうのが続く限り行使できるわ。

勿論、始めのうちから大きな事は出来ないわ、どんな力でも段階を踏む必要があるの。

簡単に言えば、強い力を使いたければ、地道にレベルを上げましようってね。

能力を使つてれば、異世界での生活はそれほど難しいものではない筈よ。

私でも何とかなったし：ゆっくりがんばってね！』

何そのむかつくゆっくり顔。

もう良いや、逝ってきます。

こうして、俺こと鎌田佳佑は投げ遣り気味にハッピーエンドを求めて異世界に旅立つこととなった。

これは後に異世界で伝説となる男の記録である！……………多分。

行動記録01：便利な幻想変換（チカウ）は取り扱い要注意！（前書き）

今回から神姫の一体が登場します！
はじめに登場するのは勿論…。

行動記録01..便利な幻想変換（チカラ）は取り扱い要注意！

目が覚めると、辺りはびっくりするほど真っ暗だった。

何だコレはと思って辺りを見渡すが、やはり何も見えない。

手探り、足探りといった感じで周囲に何かないと探すと、ようやく理解できた。

真っ暗なだけで此処は俺のアパートの部屋だと。

「つてことは、コタツの上に携帯置きっぱなしだよな」

部屋には災害時の懐中電灯もおいてあるが、それに手を伸ばすよりは携帯に手を伸ばしてライト機能使った方が良い。

携帯はコタツの上を少し探ると直ぐに見つけた。

折り畳み式の形態をぱかりと開き、なれた指使いで一つのボタンを押し続けると携帯のライトが点灯した。

「……あれ？窓の外、何かある？」

そう思って窓際によると、俺は絶望というものを思い知らされる。

窓の外は敷き詰めた様な岩肌が隙間なく広がっていた。

「ちよっ!?! 転移先って地面の中かよ!?!」

コレはかきなくヤバイ。

地面の中という事は『酸欠』とか『窒息』で死ぬ可能性があるって事だ。

今の気分は昔ゲームでやった『いしのなかにてればーとしてしまった!』という表示を見た時よりも100倍悪い気分だ。

いきなりゲームオーバーくさいけど、コレってなんて罰ゲーム？

いや待て落ち着くんだ俺。

俺は神様（自称・元女子高校生）から特殊な力を貰っている！
玩具を本物に変えてしまうようなすごい力だ！

それを使えばきつと何とかなる！

そう思って俺は早速使えそうな玩具を探す事にした。

「こういう時、アニメやゲームだと地面の下にドリルで穴を掘って潜る、だよな。

そういうのってやっぱり代表格としてはゲッター2なんだけどなあ」

残念な事に俺はゲッターのプラモは持ってない。
何かヒントなかったっけかなあ…。

あ、そういえば神さんがコンプだかコンプティークだかっていう腕につけるタイプのパソコン用意してくれてるって言ってたっけ。
そう思って明かりで部屋全体を照らすとなんだかそれっぽいのがあった。

「んー…なんかコレ、防具みたいだな。

なんだっけ、剣道の…あ、そうだ、籠手ってやつだ」

自分の特技として、基本的になんとか物事を見極める目がある。
これは初めて見た様な物だけど、なんとなくそれがどう動いてどういう風に操作すればいいかが、だ。

もつとも、それは余り複雑な機能を持っていたりすると流石に理解の範疇を超えるが、それでも他人よりはそういう物に対する直感的なものに優れているという自負があった。

知識的な面では少々自信はないが、直感的な面では他者よりも自信

がある、程度のものだが、これで今までそれなりにやってこれたのであながち馬鹿に出来る能力でもないと思っていた。

「これが電源ボタンか？で、コレが操作用の？まあ使って見るか」

特に問題無さそうだと判断して自分の左腕にまきつけてから起動させる。

すると、3秒もしない内に起動を終了し使用可能な状態になった。OSはどうやらプレステ3とかで使われているメディアクロスバーとか言うのに準じているようで、扱いそのものは難しく無さそうだった。

画面を見ると、画面がなにやらニンテンドーDSのタッチパネルに似た質感を持っている事に気づき、コレに直接触れることで操作も可能という事に気づいた。

画面に触れると実際に思ったように操作できる事が俺のとてもみみっちいプライドを満たして思わずにやけてしまう。

にやけたついでに頭がキチンと目覚めてきたのか能力の使い方以外にももう一つ目的がある事を思い出した。

「ハッピーエンドか：人生長くて100年、ハッピーエンドを迎えられる人がどれだけ居るやら。

まあ、俺自身もハッピーエンド（ご都合主義）が好きだから問題ねーけどさ」

ぼちぼちといじってネットブラウザを見つけ、そこからブックマークに登録されていたウィキペディアを利用して『上位世界存在』を検索する。

すると、面白い事がわかった。

・上位世界存在

本項は主に界位Y1985600824の太陽系第3惑星地球、日本国に生まれた人間が主となっている。

特にそのなかでも中二病（ネットスラングの厨二病とは異なる）な人間がメインであると推定されている。

選定は神（前原・鼎）の選定ではなく、本当に偶然からそうなっているらしい。

彼らの殆どは極僅かな例を除いて特殊な道具や能力を与えられ、下位世界で『滅びの創造』に対する『ハッピーエンド』を与え、自らが持つ『創造の力』を成長させ、元の世界に戻るための力を得る為の旅を行うのが殆どである。

道具に関しては個人認証があり、本人或いは本人が認めた者以外は使用不可能であり、能力は基本的に思い浮かべれば使えるという判り易い仕様となっている。

能力の使用の具体例として、火よ灯れと指先に意識を集中して念じれば、指先に火が灯る、といった具合となる。

個人個人で能力に違いがあるので、詳しくは自身の持つ能力を振り返っての研鑽が必要となる。

……神さんの名前、前原・鼎っていうのか。

………にあわねえっ！

だって、神さんの見た目って思いっきり金髪碧眼で衣装はゼノサーガのもっこすだったぜ！？

まさか、異世界……異世界に渡ったせいかな！？

恐るべし、異世界。

まさかっ、自分も将来的にああいう風に日本人離れする可能性が！？
気をつけよう……。

決して男前でも美男子面でも美少年面でもない、やや老け顔で白髪が生えてる凡人面の自分だが、俺は今の自分がとても気に入ってる

のだからな。

まあ、それはともかく…結局手っ取り早く脱出する手段は見つからなかった。

んーそういえば、窓は駄目だけど玄関の扉は？

そう思って玄関まで行き、扉を開けると。

「空間があるな、空気もある」

ひんやりとしていて、耳が痛くなりそうなほど慎…とした静かな空間。灯りを向けるとそれなりに広く、長い一本道が見えるようだ。しかし、一本道は長すぎてどこまで続いているかわかったものではなかった。

「参ったね、このまま進むのは少し怖いかな？」

それにこういうので独りって…ドラクエ1の主人公じゃあるまいし俺にはきついわ。

何か、話し相手がいたりゃ良いんだけどな」

そう思って視線をもう一度自分の部屋の中に戻すと、直ぐに目に付いたものがあつた。

それは忍者の格好をした全長15cmの少女の人形だ。

水色がかつた白髪、黒字に紫のラインの入った忍び装束、黒い翼を身に纏い、手には忍者鎌と大手裏剣、ついでにくないと忍者刀も装備させてある。

「……いけるか判らんけど、試すのはありか」

そう思って棚の上に飾ってあつた少女のフィギュアを手に取り、一

度部屋の外に出る。

そしてフィギュアを持った手を宙に翳して心の内から湧いて出た言葉
を口にします。

「輝け、俺の幻想！^{ユメ}目覚めろ、武装神姫・フブキ！」

その瞬間、カッと光が迸る。

フィギュアは強烈な光を放ちながら質量と質感を変え、更にただの
ゴムの塊だったフィギュアの髪をサラサラのヘアーに変化させる。

「Group K2製、MMS-Automation 神姫 忍者
型フブキ。」

GK06N1 セットアップ完了、起動します」

質量を変えたフィギュアは口を利き、体を起しながら報告し、問い
かける。

その問い掛けは、ネットゲームで武装神姫バトルロンドをプレイし
た時と全く同じものだった。

なんだか感動だっ！

「オーナーのことは、何とお呼びすればよろしいでしょうか？」

「そうだなあ…何か呼びたい候補とかある？」

尋ね返すと「え?!」っと驚かれたが、直ぐに考える素振りを見せ
て。

「……では、そのままオーナーと呼ばせて頂きたいと思います」

「おっけー、じゃあそう呼んでくれ」

「はい、では以後はオーナーと呼ばせていただきます。

すみません、よろしければ私に名前をつけていただきたいのです

が」

「名前か：フブキのままじゃ駄目なのか？」

この世界じゃ神姫はお前だけだし被る事はないと思うんだが。

それに、余り言いたかないが俺はネーミングセンスが悪いらしくてな…。

下手な名前をつけるよりも、フブキって名前の方が似合うと思うんだ、結構本気で」

その言葉を聞いて彼女は少しだけ考えて。

「わかりました、元よりこの身はオーナーの為にあります、問題はありません」

と、笑顔で答えるのだった。

ちなみに、俺はとある一身上の都合から女性には基本的にさん付けで呼ぶから、君の事はフブキさんと呼ぶ、いいね？

「はあ、構いませんが…」

そういつてフブキは俺の手から飛び立ち、黒い翼を羽ばたかせながら俺の肩ぐらいの高さを飛んでいる。

「オーナー、指示はありますか？」

ん、フブキさん。君って暗視能力ある？

俺の問い掛けにフブキさんは笑顔ではいと答える。

「私は忍者ですので暗がりでの戦闘が得意です。」

ですのでこういったところでの活動は寧ろ願ったり叶ったり、です」

そりゃ心強い。それじゃあ俺の現状を説明するよ

そうして俺はフブキさんに俺の身に起きた事、そして今すべき事を語る。

「…なるほど、わかりました。

オーナーはご自身のステータス画面は閲覧可能でしょうか？」

フブキは俺の言葉を疑う事をせず、そのまますんなりと信じてそして俺に問いかける。

俺は荒唐無稽な事を信じてもらえるという事を内心で喜びつつ返答する。

「自分のステータス画面か…。どうだろうな…コイツにその機能があれば、見れると思うけど」

そういつて、腕に巻き付けたコンピューターを指で示す。

「では、申し訳ありませんがご確認をお願いします」

「そうだな、確認は早いうちが良いしやっておくか」

そうしてコンピューター：Compを調べていくと、マッピング機能、倉庫機能、ネット機能、ステータス表示、意思疎通機能、生体センサーなどの機能があることが判明した。

と、いうか、メニューの中にヘルプがあつて、それに書いてあっただけだ。

そして、フブキさんが気にしていたステータス画面だが…。

カマダ・ヨシヒロ

LP…5000／5000

SP…250／250

CP…35／50

状態…異常なし

運動力…60

知力…85

魅力…75

特殊…

・不老不死

・創造の力ユメヲホンモノニ
(幻想変換)

・強運

あれ？強運？

俺って運良いの？

うっそだあ。

運が良かったら、路上に転がってる犬の糞とか踏んづけたりしないだろうよ。

つか、それよりもLPとSPはライフとスキルの略だろうけど、CPって何さ？

何となくタッチパネルのCPの所に触れるとその回答が表示された。

キャパシテイポイント…

創造の力・幻想変換を使用する際に増加するポイント。
力を解除したりすると増加していたポイントは減少する。

最大値は創造の力に関連する能力を使用し続けることで上昇する。

現状で幻想変換：詰まり俺の力を使った対象はフブキのみだ。

つまり、フブキのポイントは35となるのか、なるほど。

高いのか低いのかわからんわ。

でもとりあえず今はコレでOKとしよう。

「なるほど：オーナーの力でこの様に活動できていることは理解していましたが、やはり制約はありましたか。

残り15ポイントで何が出来るかわかりませんが、何か武器になりそうなものを探してみても如何でしょうか？」

「武器、か」

「はい、野生の動物などに襲われる可能性を考慮して、何か持つ方が良いと判断します」

真剣な表情で俺に告げるフブキ。

俺はそれに頷き、部屋に戻って何かないかなあ：と押入れの玩具箱をあさる。

「あ、コレなんか良いかも」

そう言って見つけ出したのはとあるヒーローの変身ベルトだった。

「輝け！そして熱く蘇れ俺の幻想^{ユメ}！」

それ変身ベルトが光りかけて…

そのまま光らずに光が消えた。

なんでさ？

「オーナー、腕の端末に警告メッセージが出ていますよ」

なに？

『警告…対象の変換は100ポイントのキャパシティが必要となります。』

上限を超えた変換はユーザーの生命に致命的な障害をもたらす恐れがあります』

……あつぶねー。

あれ、フブキ…何その微妙な表情。

「あの、オーナー…非常に言いづらいのですが、ご自身の右手の指をみてください」

H A H A H A、何を言ってる…ダー！！
な、中指が吹き飛んでるううう！！！！

「幻想変換のCPを超えた反動のようですね。

これでは、無理に使おうとした場合、どうなっていたかを考えるとおそろしいです。」

少々失礼します」

そう言いながらフブキは俺の服の一部を破り、破った部分を利用して第二間接から先が吹き飛んだ指の止血を行う。

俺が慌てたせいか、フブキの方は冷静？

正直すつごく助かる。

「オーナー、コレはあくまで緊急の処置です。部屋にもどって何らかの処置が出来る道具を探した方が懸命です」

ソレだったら部屋にある薬箱の中に包帯とかガーゼとか色々そろえてるからそれ使おう。

「意外とキッチンと揃えているのですね」

どういう意味だっ。

まあ良いけどね。

キッチンと揃えている理由は簡単、俺はね、昔から良く怪我をしてい
たんで応急手当用の道具だけは欠かしたことがないんだよ。

「手当てを行います、よろしいですか？」

ああ、構わないけど…なんで手当てとか出来るん？

「本格的な手当てのデータはありませんが、こういった応急の手当
ては神姫のプリセット（初期設定）データに登録されていました。

その他にも神姫には様々なプリセットデータが記録されています」

：不思議だ、ついさっきまでは本当にただのフィギュアだったのに。そこまで本物っぽくなるのか。

「幻想変換の影響で本物の神姫が存在した場合のデータ、なのではないかと推測します」

すごい、凄いご都合主義ファンタジーの匂いを感じる。

「ご都合主義でもソレで助かるのならば良い事だと思います。応急手当、完了しました。

と、言っても止血と包帯とガーゼでカバーをしただけです。

これ以上は此処の施設や道具では不可能です、早急に病院などの施設に向かう必要があります」

なるほど、余計に脱出の必要性が出てきたわけか。

にしても、痛くなかった気がしたけど段々と痛みがしてきた…というか超痛い。

「それは先ほどまで痛覚を無自覚でシャットアウトしていたからだと思います。

痛覚があることは生きている事の証、だそうですから耐えてください」

淡々と告げるフブキさんに俺は少しくらいは男らしく堪えようと言う気概が生まれた。

そしてその後、俺は結局ガスガン（ベレッタM92F）とガスショットガン（イサカM37ポリス）と予備のカートリッジと弾丸等と鉦（お遊びとネタで買ったもの）を用意し、それらを幻想変換して洞窟を探検する事になった。

ちなみに、銃のコストはガスガンが4でガスショットガンが7だった。

目の前に広がる暗闇の洞窟。

この先に出口があるかは正直な所不明だ。

だが、ぶっちゃけこんな所に長居をするつもりはない。

人間はこんな暗くてじめじめつとした洞窟に永住できるようなつくりになっていないからだ。

そして、足元も非常に不安定であり滑ってしまったり、見通しの悪い段差に落ちてしまったりするのは仕方ないのだ：特に俺の様な探検家でもない一般人の場合は。

でで、何が言いたいかというと、だ。

「まさか本当に不死身とはなあ」

実は俺、洞窟内の段差で転んで頭を強打して死んだり、奈落に繋がっているんじゃないかと思われるような底の見えない崖を落下して死んだりしてしまったのだ。

そして死んで気がついたら元の自分の部屋というわけだ。

ちなみに俺の死亡に関してはフブキさんがキッチンと確認していたし、派手な血の跡とかが洞窟に残っていたので間違いがなかった。

死体が残っていないのは俺が俺の部屋に転移と同時に肉体の復元と蘇生が同時に行われるからだろうと直感であたりをつける。

なにせそれ以前にぶっ飛んだ筈の俺の指が元通りだったからだ。

まああれだ、いわゆる死に戻りってヤツだきつと。

そして、俺が死ぬとフブキさんも一緒に家まで転移させられるようだ。

死ぬ時はひっじょうに怖かったし痛かったし辛かった。

「オーナー、この先は特に段差も崖も無い様ですので進んで貰っても大丈夫です」

ふわーっと黒い翼をはためかせながら飛んで帰ってきたフブキさんが偵察結果を報告する。

いやぁ態々すまないな、フブキさん。

「いえ、オーナーが何度も痛い目に遭うよりはこうした方が堅実です。」

それに本当に大変な事態は脱出に時間が掛かり過ぎてオーナーが餓死し続ける状況だと推測します」

んだな、そうならもう悪夢としか思えない。
そうなる前に脱出しよう。

実際死ぬ前と同じぐらいの腹の空き具合だしな。
詰まる所は空腹だ。

そうして進んでいくと喰らい洞窟の中に川があった。

しかも川幅は軽く20m近くあり、腰まで浸かりそうな深さだ。
幸いな事に勢いはそれほど強くは無い様だが…。

「この川の中、何か潜んだりしないよな？」

「そういう時はC o m pの生体リーダーを使用されてはどうですか？」

あ、それがあったか。

結果から言うと、俺の周囲には残念な事に脅威となりそうな生命体は居ないようだった。

具体的には、虫程度の大きさの生命体しか居ない様子だった。
その虫にしても数はそう多くないようだ。

「あぎやぱー！」
「オーナー！？」

[illegible]

二年前にようやく待望の娘をもうけた父と母へ。

息子は今、ある意味無間地獄？な喰われる痛みと水攻めの地獄の苦しみを味わい、その後ようやくと自室で復活するに至りました。

世の中には痛いのか苦しいのが気持ち良いと思う人種がいるそうですが、自分は絶対に違うと確信し、友達にはなりたくないと思うよ。

[illegible]

32

まさか水に脚を入れた瞬間に一斉に群がって皮膚を食い破り、同時に神経を毒で犯して行動不能にさせ、ゆっくりと肉を喰らい続けるとか……超悪夢でした。

しかも、発狂とか気絶とかできずに最後は脳を食われてデッドエンド。

昔エロゲーで蟲風呂責めとか言うのがあったが、アレは確かに拷問だというのが理解できた。

アレは正直二度と味わいたくない。

「いや、流石にあの終わり方は凹むわー……人として」

こうして蘇ってみるとアレなのだが、自分はどうやら精神的にタフ……というか色々壊れてしまったようである。

まあ、それも仕方ない、人間は基本的に何度も死ぬように出来てないしな。

「オーナー……助ける事も叶わず、役立たずで終わってしまい申し訳ありません」

ずううんと凹みきったフブキさんが涙目で俺に謝罪する。

「なに、フブキさんはキチンと役立っているよ。」

そもそもあの状態じゃ既に手遅れだったし、君の助けを拒んで俺はあの時君を遠くに投げ飛ばしたしな。

寧ろそっちの方が大丈夫か？どこか怪我とかは？」

「私のほうは幸い大した事はありません。」

自己修復装置が働いたので既に完治済みです」

そうかと俺は頷き、再び準備を整えて探索を再開するのだった。

さて、再び先ほどの川まで辿り着いた。

この川の渡り方だが既に攻略法自体は考えてある。

「どんな方法なんですか、オーナー」

「これだっ！」

そう言ってC o m pから取り出したのは2人ゝ3人は乗れるビニールボートだ。

夏の海とか湖でたまーに見かけるアレである。

去年、友人と海に行ったときに友人が現地で購入して使ったのだが、片付け……と言うか持って帰るのが面倒という理由で俺に押し付けられた物だ。

押し付けられた当初は少々憤慨したが、まさか此処で役に立つとはおもわなんだ。

「あ、オーナーが部屋で探していたのってそれだったんですか！」

「んむ、コレだったんだよ。これならなんとか先に進めるだろ」

ちなみに幸いな事にこのビニールボートはオール付きであり、川を渡るのに支障はなかったりする。

「膨らませるのに苦勞したの以外は問題なしだな」

「そうですね」

俺はビニールボートのセットをC o m pに収納して更に先を進もうとして……

どうにもこうにも不運が重なっているんですが良いアドバイスありませんか？

あ、勿論宗教抜きで。

[illegible]

とりあえず今日は探索を打ち切り、冷蔵庫に仕舞っていたナマモノをカセットコンロで調理して早めに寝る事にした。

探索二日目。

探索前に冷蔵庫の中身や調理道具、その他にも使えそうな道具を全部Compに突っ込む作業から始めた。

というのも、進みきった所で野宿などになった場合に食事に困るのは確定的に明らかーってなものであるからだ。

と、言うわけで俺はあの後、不運に見舞われることなく順調に歩みを進め、広すぎる空洞のなかにおつ建つて居る見た目5階建てぐらゐの洋風の城を発見したのだった。

「……フブキさん、これどうおもう？」

「なんというか、色々とありえない事だと思います。」

普通、こういった洞窟やなんかに城を建てるのはありえないかと」

「とりあえず探索してみるか。」

「…………ごめんフブキさん、ちよいと偵察してきてくれ」

「わかりましたオーナー。暫くお待ちください」

そう言ってフブキさんは黒い翼を用いて俺の肩から飛び立っていった。

あ、ちなみにフブキさんの普段のポジションは俺の左肩らしい。

時々頭の上になったりもするけどな。

そんな事を考えながらCompでリーダーを監視しながら慎重にその辺を歩いていると、リーダーに赤い点の反応が3つ映った。

（ゲームとかだと、コレは敵だよなあ）

そう思いながら俺は物陰に隠れながらショットガンを構えて何時でも撃てる状態を維持する。

ちなみに、俺の格好は灰色のジャージの上下にグレーのニット帽に灰色のマフラーという灰色づくしの格好であり、周囲にピツタリくつつくと割りと周囲の色に紛れて見分けづらい状態だ。

なんでまたグレー尽くしな格好かといえば、他の衣装は死んだ時に血塗れになっていたり、食い破られていたりと散々な状態だからだ。なので、これ以上は私服を汚したくないという心理が働き、高校時代に使っていたジャージの上下を懐かしみながら使っているわけである。

息を潜めてCompのリーダーを自分と岩肌の間に入れ、こっそりとアッチコッチと目だけで見回しながら待つ。

リーダーに映る赤い点はどんどんとこちらに近付いてきている。

ついでにカツンカツンという音とガチャガチャという金属がぶつかるような音もしている。

はてさて、人か？それともバケモノか？

緊張と好奇心と僅かばかりの恐怖心が俺を襲う。

「ゲッゲッゲッ」

「ふしゅるるるる」

「ふしゅー」

はい、残念バケモノでしたー！！

ちょ、待ってくれよ。

なんでいきなり敵が見た目剣を持ったりザードマン＋バイオハザードの追跡者っぽい×2なんだ！

しかも、追跡者の片割れはなんだか女性体っぽい感じで胸はあるけど厳つい顔とゴツイ体で色々台無しだー！！！！

ついでに来ているのはコートじゃなくて皮の腰巻っぽいものだー！

そう思っていると、リザードマンと目が合った。

「「……………」」

そして何ともいえない沈黙を経て。

「人間だー！」 「うひゃあああああー！！！」

バレるのと同時に俺は逃げ出した。

どう考えても素人の俺が、武装しているとはいえ明らかに強そうなの3対相手に勝てるだろうか、否、勝てる筈もない！

銃があるから落ち着いて迎撃すればいいと一瞬思ったが、ビビりきって混乱した俺は恥も外聞もなくとにかくダッシュで逃げる……があっさりとりザードマンに追いつかれて。

「ひゃっはー！新鮮なニクだー！！」

「ぐあ……」

俺は剣で首と胴を泣き別れさせられて死んだ。

体が走っている時の勢いのまま倒れたので、凄い勢いで転んでいたのは我ながら間拔けに思えた。

ついでに、頭は追跡者モドキに踏み潰されたぽかった。

[illegible]

前略

近所に住んでる友人、石動涼へ

聞いてくれよ涼、なんか知らないけど化けモンに殺されたけどどうすんよ？

ははっお前だったら案外こういう遭遇戦もなくて乗り越えち
まいそうだよなあ。

とりあえず、元の世界に戻ったら何時もの駅前居酒屋で飲もう。

P.S. ついでにポケモン交換しよう。

40

「どーせ死んでも復活できるから特に問題はねーだろ！」

本音を言えば俺としちゃ問題はある。

痛いのも怖いのもいやだしな！

けど、俺は空元気でそう言い切ってカラカラと笑ってみせる。

しかし、フブキさんはきまずそうに俺に告げる。

「あ、いえその…問題はあります」

「え、まじ？」

「はい、オーナーは前回の死から5年ほど復活に時間が掛かっています。」

その間にこの部屋は私が頑張って掃除をしていたのでソレほど酷い事になっていませんが…。

部屋も何時ま保つかわかりませんよ。

この洞窟の湿度のせいで腐食したり錆びたりしてボロボロになりつつあります。

現に畳は既に腐りつつありました。

なので残念ながらオーナーのかつての部屋を放棄し、地底城に拠点を移動しました」

その言葉を聞いて俺が言えることはただ一言。

「まさかの日暮巡査プレイ。5年寝るとかありえないわ」

さて、俺からすれば半日ぶり、フブキさんからすればおおそ5年ぶりの会議だぜー！

ちなみに会議はあの地底城の中にある会議室っぽい一室を利用している。

「でだ、一番聞きたい事があるんだけど、良いか？」

「はい、なんででしょうか？」

フブキさんは俺の言葉を今か今かと待ち構えながら応える。

「なんでまた、そんな姿になってるのさ」

「え？何かおかしいですか？」

特に変化は無い筈なのですが」

いやいや、おかしいだろう。サッパリ変わってるだろう思いつきり。

「フブキさん、君は武装神姫だよね？」

「ええ、正確にはGroup K2製、MMS-Automaton 神姫 忍者型フブキ GK06N1となります。」

それがどうしましたか？」

本人はどうやら自分の姿に不思議を抱いていない。

「普通、神姫って15センチぐらいの大きさだったと思うけど？」

「あ——ああ！そういえば今のサイズに変わるようになってから、ずっとそのままだったのですっかり忘れていました！

オーナーが蜥蜴剣士と鬼に殺された後、私は一度オーナーと共にオーナーの部屋に移ったのですが、その後オーナーの死因を探そうと直ぐに現場に戻ったんです。

すると、オーナーが死亡したと思われる現場の付近には蜥蜴と人間を足して割ったかのようなモノと角の無い鬼のようなモノを2体発見しました。

私は蜥蜴剣士の持つ剣に付いていた血と、鬼の足に付着していた血から、オーナーを殺したのはアイツ等だと確信しました」

そう言ってフブキさんはフツツと嗤う。

何故かその表情は笑顔の筈なのに目が笑っていない様に見えて――。
思わず俺は後ずさる。

「そして思わず戦闘モードに入ってしまったって、気がついたらずっとこの姿でした。」

あ、オーナー安心してください。

蜥蜴剣士の巣と鬼の巣は全て『掃除』しておきましたから」

そう言うフブキさんを改めて見る。

関節とかも含めて全部人間と同じように見える様になり、目算で身長160ぐらいの美少女の姿になったフブキさん。

そのフブキさんがズズイと俺に近寄ってきた。

何故だろうか、今のフブキさんとはとっても迫力があるね。

「酷いですオーナー。私、オーナーが目を覚ますのをずっと待っていたんですよ？」

オーナーの体を洗ったり、着替えをしたり全てしていたんですよ。そういえばオーナーって、一件普通そうに見えて実はおち――」

「ストップ、そこから先はストップだ。それ以上はまずい気がする。そして、俺が持つ女の子への幻想を壊さないでくださいお願いします」

色々と見られてしまったらしいが、とりあえずフブキさんの口からアレの名前が出る事を封じておく。

美少女がそういう事を言っではいけない。世の武装紳士達が絶対に凹むから。

「オーナー、オーナーが思っているのはあくまで幻想で実際の女性
は――」

「良いからストップ、男にはね、分かっているけど抱いておきたい幻

想があるんだよ。

「というか俺の能力はすべて幻想が重要なの！」

言い切ってから俺は路線修正を行った。

「それで、外に出る方法はあった？」

「残念ながら洞窟は途中で崩落を起していたようです。このままでは脱出は無理です」

その言葉に俺は思わずがっくりと来るが、直ぐに持ち直して城の事を聞くことにした。

「城の中はどうなっている？あと、洞窟に関しても知りたい」

「城の中には使途不明な道具やまるで魔法陣のようなものが張つてある部屋、玉座のある大広間、会議室、食堂、厨房、娯楽室、図書室、倉庫、数多くの寝室、それと他と比べ一段豪華な寝室——ここですね。あとは兵舎と思われる区画と大浴場、武器庫、工作室、牢屋、使途不明な部屋などがありました。」

後、城全体になにやら特殊な力場が働いている模様です。そのこのランプの様に、灯りとなる火は燃料などがなくてもずっと付き続けているようです。

実際5年前に始めてココに偵察してきた時から一度も整備の手は入っていませんが、常に明かりが灯り続けています。

次に洞窟の内部に関してですが、此処より他はかつて蜥蜴剣士が居た区画、鬼の居た区画、その他にも行き止まりが多く存在しました。

また、洞窟の中にはそれ以外にも少数の動物：主にネズミ等が居ました。そして川の中ですがどうやら魚も居るようです。

といっても川は私たちが最初に渡った川ではなく、それ以外の川

です。

川は5つあり、その内でも一番危険度が高いのがあの川だった様です。

他の川は見て直ぐにわかる危険物が居る程度でしたので、あそこと比べればマシだと思います。

他にもこの辺りは火山地帯でもあるらしく、大浴場には42度の温泉が常に流れ続けています。

日本人としてはとても喜ばしいですね」

温泉とな！

露天風呂ではないのが残念だけど、温泉とは素晴らしいなあ。

「そういえばフブキさん、神姫って基本はバッテリー駆動だったように思うけど実際どうなのさ？」

「現在は電力によるバッテリー駆動というわけでも有りません。オーナーの近くに居ればバッテリーは自然と回復するようです。

接触していれば更に効率がいいみたいです。他にも食べ物などからも微々たる物ですがエネルギーを摂取することが出来ました。

フルチャージ状態で戦闘を行わなければ7日間は稼動できます。ですが、この姿で武装モードの戦闘を行えば5時間でバッテリー切れです。

通常の神姫として戦うのは敵性存在の事を鑑みるとサイズ差が大きい為得策とは思えないので推奨出来ません。ですがやろうと思えばこちらでなら1日中活動が可能です」

「……電力がエネルギーと言われないのを幸いと思うべきか、それとも少し悩むべきか……。

電力って言われたらバッテリー補給不可だもんなあ」

「オーナーの傍に居れば電気代いらずでバッテリーチャージ可能ですからかなりエコですよね」

「ま、そだな」

この日は始めてフブキさんと一緒に食事をして、フブキさんと一緒に温泉に入ってフブキさんとゴージャスな天蓋付きのベッドで寝――。

「って、何で自然にフブキさんと一緒に風呂入ったり就寝してるんだ自分！！！」

ついでに、風呂に入ってた時の記憶は余りにも自然に行動されていた為、邪念を抱く事無くふつーと一緒に温泉に入っていた記憶しかない。

あんなトコやそんなトコに視線が向く事もなく、極普通に「温泉気持ち良いねえ」「そうですね」と会話したぐらいだった。

幾らなんでも美少女然とした容貌を持つフブキさんを前にして何も感じないとか枯れ過ぎだ、男として終わってる。

そう思って思わず心の中でガックリと凹んでそのまま暗澹たる気分で眠りに付いた。

行動記録03：妖精さんがみてた！地底城は妖精付きの物件です！

地底城で復活してから早2日。

「やっぱり、この洞窟内でずっと過ごすのは無理があるよな。主に食料面で。」

部屋から持ち出した食料は全部食いきったし、取れるものでマトモなものは魚だけか」

「そうですね……残念ながら、この洞窟で得られる魚だけでは食生活に支障があります」

この洞窟の川で魚が釣れる事は判明していたのだが、釣れる魚のサイズは非常に小さかった。

具体的に言うとししゃもぐらいの大きさかな？

で、これだけしか得られる食料が無いとなると流石に色々苦しい物がある。

一応苔の類も生えていたが、Compで調べた限り全部毒だった。

「こうなったら、城の中をくまなく探して何か外に出るヒントを探すか」

「城の中をですか？」

「よくわからないの部屋があっただろう？そこを重点的に探索してみたい」

と言うのは建前で、本当は城を隅々まで見て回りたいだけだったりする。

俺を見ていたフブキさんは何故か微笑ましいものを見るような表情をして分かりましたと言う。

「むう、何で笑ってるのさ」

「いえ、オーナーって子供っぽいですね。

オーナーの事、考えてみれば全然知らないものでそれが判ってうれしいんです」

ははは、愛い奴めとか洒落のつもりで言い放ってからふと思った。

普通の男だったらこういう笑みでオチるんだろうか？

まあ、俺は正直恋愛とかそういうのに非常に鈍いらしいので普通に可愛いとしか思えない程度だが。

「オーナー、こちらが使途不明の部屋に通じる廊下です。

部屋は複数あり、すべてに物理的なものではないバリアーが形成されているようなので中の様子は判りません」

「……複数？

それにバリアーって……ふうむ、ちょっと参るね」

本当にバリアーだとしたら、どこかにそれを解く鍵があるかもしれないが……。

これが個人認証の類だったら正直どうしようもないぞ？

呟きながら石造りの廊下を眺める。

廊下は等間隔で明かりが灯っており、やや薄暗いものの中世のお城……というかRPGのボスの城チックな雰囲気漂っている。

まあ、これそのものはほかの廊下と一緒にだ。

廊下の左右、明かりと明かりのちょうど真ん中ぐらいの位置に両開きの木製の扉がある。

それぞれの扉の右隣には木製と思われる板が立てかけてあり、意味

不明な記号が描かれている。

この記号は間違はなくこの城の住人達が用いていた文字だろう。象形文字ではなく、どちらかといえばラテン語の類に近い形のつくりをしている。

まあぶっちゃければ割と単純な単語の組み合わせという事だ。とはいえ所詮カンでしかないのでアレコレ考えるだけ無駄だ。

「一見するとバリヤーっぽいのは見当たらないけど……」

「手を近づければお分かりいただけるかと存じます」

「ふうん？」

俺は何の気なしに手を出すと、ゴスツと普通に壁にぶつけたような感覚だ俺の手に帰ってきた。

さて問題。

大して意識しないまま普通に手とかを壁にぶつけるとどうなるでしょう？

アンサー

「っゝゝ！」

手加減無しにぶつかるので割りと痛い。

とはいえ突き指をするような体制でもなかったのですぐに痛みは引いた。

「あ！？大丈夫ですか、オーナー！？」

「大丈夫だけどうっかりしてた。そうか、これがバリヤーね…質感はまるで石やコンクリの壁を触っているみたいな感じだな」

「はい」

「ふうむ、不思議なもんだな……」。

バリヤーって熱かったり痺れたりするもんかと思ってたけど、本当に石を触ってるみたいだ」

俺はぺたぺたとバリヤーに触りながら呟く。

これ、目の前の扉が開いてたらパントマイムもどきだよなー。

「こんな感じのがすべての扉に？」

「はい、その為この部屋の先には一度も侵入できた試しはありません」

「そうか……さすがにフブキさんの武装じゃ壁破壊とかには向かないしなあ」

フブキさんの武装は全部が刃物だ、しかも鋭さを優先するタイプの斬るものだ。

これが重量で押し切るタイプだったらまた違うだろうが、相性が悪いの一言だ。

本気で破壊するならハンマーとかドリルとか爆弾や砲撃系の武装が必要だろうか？

「お役に立てず、申し訳ありません」

俺の呟きを重く取ったのか、フブキさんがガチで凹んだ。

うわ、この子かなーりまじめだなあ。

「気にしない気にしない。

こういうのは相性の問題だよ。

フブキさんはこういう壁破壊とかよりも普通の戦いとか探索で大いに役立ってくれてるじゃないか。

うん、問題ないよ。

まあ気楽にやろう。滅入っちゃう様な状況ではあるけど、凹みな

がらやるよりは気楽な雰囲気を出してやるほうが楽しめるってものだ」

「……はい、ありがとうございます」

若干持ち直した様子で少し弱弱しい笑顔を見せてくる。

うーん、

カメラがあつたら思わず撮っておきたくなるなあ。

まあ、俺はカメラを持ってないしデジカメもあるけど電池切れで使えないからあきらめよう。

「そうだ、壁に手をついて端から端まで歩いてみよう。

もしかしたら何かわかる事があるかもしれない」

「……？ 良く判りませんがわかりました、やってみましょう」

唐突に思いついたことを口にしてフブキさんに伝える。

理由はちゃんとある、バリヤーと壁の境目とか隠し扉とかを探すのだ。

特に見つけたいのは隠し扉だ。

昔やった棒緑の剣士のアクションRPGや超人や巨大メカと戦う潜入工作員のゲームで本命の扉が開けられない時はその近くに隠し扉や通風孔があつて進入できる、というのを思い出したからだ。

もつとも、アレはゲームだからそういう風になっていたのだとも思うが。

「……………まるでゲームだな」

「え？ どうかしましたかオーナー」

「ああ、どうかしたぞ！ フブキさんここの壁に触ってみてくれ！ ココだけ感触が違うー！！」

通路の一番奥、この通路に入って歩いて15mで行き止まりなのだ

がそこに手が当たった瞬間、
今までの石造りの感覚ではなく、まるで木材に触れたような感触を
得たのだ。

「まるで木材……ということは……！」

「ああ、コレがアタリだ！まずはドアノブを探そう。

なかったら扉を破壊しよう！」

「はい！」

ドアノブ探し始めて5分、俺達はようやく気づいた。

「コレ、ドアノブ式じゃなくてスライドタイプだったんだな」

「まさかオーナーが偶然寄りかかった際に判明するとは……」

ちなみに、よっかかる勢いそのままにドアが横スライドしたので俺
は体制を崩したそのまま倒れてしまった。

「ううん、まさかの急展開。

こうまで勢いよく進むと先が怖いなあ」

「そうですか？」

「ゲームとかでの話なんだけど、アクションゲームの謎解き……。

途中までいい勢いでステージの出来てる時とか殆どの場合肝心の
所で全然解けないんだよ」

「大丈夫です、きっと。何とかなりますよオーナーなら」

そんな感じでスライドドアの先に進むと、今度はなにやら不思議な
場所に出た。

「魔方陣が敷かれている……祭壇？」

「どこのファンタジーRPGだ、これは……」

眩きながらも二人して魔方陣に近寄る。
すると、どこからともなく声が聞こえた。

『問おう、あなたが新しい城主か？』
マスター

どこか凜とした……だけどやや幼げな声が聞こえた。

「……心霊現象か？」

「……さすが異世界、まさかこの手の現象が実在するとは」
『心霊現象ではありません！私はこの城憑きの妖精です！』

どうやら昨今の心霊現象は自己主張が激しいようだ。

見た目は神姫（15cm）程度で、ぶっちゃけ神姫を見ているのと変わらない。

「……さすが異世界、ハードルが高い」

俺は思わず汗を拭う様な仕草を試みせる。

『どんなハードルが高いというのですか！？』

「いや、普通に妖精がいるとか城に憑いてるとかそういう辺り？
俺の知っている一般常識がまるで通じない！」

「異世界ですので仕方ない気もしますが……」

ちなみにフブキさんが実際に動き回ったりおっきくなったりするの
も俺の常識の範疇外だ。

まあ、この辺りは『武装紳士達の抱いた幻想』ユメということに納得し
とこう。

俺の能力は『幻想変換』ユメヲホンモノニだしな。

「でだ……妖精さんや、アンタはこの城やこの辺りの事に詳しい……よな？」

『当然です。』

私はこの城で千年以上過ごしてきた城憑きの妖精です。

貴方達がこの洞窟に現れてからずっと眺めていました』

「見てたのかよ!？」

「時々感じた視線はこの妖精からのものでしたか」

「フブキさんは気づいてた!？素で気づかなかったのは俺だけか!」

うがーっと思わず暴れてしまいが落ち着け俺。

Be Coolだ。

そもそも身体能力が一般人ど真ん中で戦闘能力などカケラも存在しない俺なのだ。

そう、普通はわかんなくてもオーケーだ。

以上……理論武装完了。

「とにかく、何でも良いから外に出る方法とかないのか？

いい加減、俺は日の光を浴びたい!!」

『えー、外に出たいんですか?』

「出たい!そして魚以外の飯を食いたい!!」

「あ、私もできれば魚以外の食事を摂りたいです」

フブキさんも食事が出来ると判って、俺が目覚めてからは積極的に食事をしている。

だが、魚料理にももう飽きてきたのは俺と同様なようだ。

『むうー、今代の城主様はワガママが大きいのですよ』

「まてまて、城主って誰の事さ」

『アナタのことですよ？』

身体能力も見かけも運もいまいちパツとしませんが、とても素晴らしい力を持っているようなのです。

それだけのお力を持つ肩ならば城主としてぴったりなのですよ』

「素晴らしい力って……幻想変換のことか？」

『はい、それです！』

その力をうまく活用すればこの城も往年に賑わいを取り戻す事間違いないのです！』

妖精さんが良く判らない事を力説する。

まあ確かにうまく活用すれば人は増えるだろう。

「そーなのかー……つか、妖精さんやアンタはこの城を賑やかにしたい……のか？」

『当然ですよ！万物には精霊が宿り、精霊はその役目を正しく果たす事で大きく成長できるのです。』

特に施設関連の精霊は精霊の中でも人気があって、城憑きの精霊ともなれば本来は大精霊への道が開けたも同然なのです！』

これは、もしかしなくても。

「……本来？もしかして、今この場に俺達以外がないから建物は立派でも住人が居ないから役目を果たしていない……というか果たせなかった？」

俺の呟きに妖精さんはがっくりとうなだれる。

『そうなのですよー……』

以前は魔導王を名乗られるすごい魔法使いの人間の方が城主で近隣に住まう鬼族、牛鬼族、蜥蜴族、有翼族たち始めとする多種多

様な種族を統一して大魔道帝国を作られたのです。

あの頃の城主様はとても輝いていましたし、帝国も世界で一番栄え、安定し、技術力も高い国となりました。

ですが、そうなってしまふと色々な所から嫉妬を受けて『邪悪なる魔王』と呼ばれ迫害されるようになりました。

そう呼ぶようになったのはほぼ全て人間達です。

一部では精霊信仰を忘れたエルフも該当します……。

悲しい事に彼らは何の根拠もない存在しない神『ジアウス』を崇めるジアウス教を興し、それを理由に帝国はジアウスに仇なす大敵と言いがかって攻め込んできました。

その際に人間達は帝国に属する多くの種族を『魔族』と認定し迫害の対象としました。

そしてその日から地獄のような闘争の日々が始まり……』

正直長い、説明が長い。

「えーつと要は魔法使いの王様が色んな種族が暮らす国、帝国を興してすんごい栄えて、他国が嫉妬して、変な宗教が興されて、その辺りを理由に悪者認定されて滅ぼされましたよー……ってこと？」

「オーナー、それはなんだか酷い略しかたでは？」

大体は合っているようですが……」

そこまでフブキさんは言葉を区切って俺と一緒にチラっと妖精さんを見る。

『んー……なんだか酷く軽い物にされてしまった感がありますが、理解されたので良しとします。

それで、なんですけど……。

あなた方の『外に出たい』という願いを叶える代わりに、私の『城の住人を増やしてほしい』という願いを叶えて欲しいんです！

時間はどれだけ掛かっても構いません。どうかお願いします！」

なにとぞ！なにとぞー！つと時代劇でお奉行様に嘆願する村人Aの如き土下座で頼まれた。

「…………ふむ」

俺はうなずいてから少し考える事にした。

まず最初に引き受けて人が増えたりする場合のメリットデメリットだ。

メリットは単純に人が増えれば『人手』が増えているいろいろな事が出来る、そして住居を得られる。

逆にデメリットは人が増えれば人心や作業、その他諸々の『管理』等が必要となる。

例えてみればビルを借りて会社をおったて、自分が管理職に就くようなものだ。

引き受ける事そのものに現状ではメリットはあってもデメリットはないだろう。

一番の問題は俺が人を牽引する力があるかどうかだが……。

これが無理だった場合は俺は城の紹介役となり、他の人間にこの城を与えるという立場で良いだろう。

「……………って感じでどうだ？」

確かに俺の能力で数人は神姫達を住人とする事は出来るけど、それ以上は現地住人を勧誘しての発展しかありえない。

けど、正直な話そこまでうまく良くとも思っただけでなく

『……仕方ありません。できればあなたが城主となってくれるのが一番ですが、妥協するです。』

今は妖精程度まで力が落ち込んでいますので、一度大地震を起こ

してこの城の外界との封印を解くので精一杯となるのです。

けれど住人が増えてくればその活気が私の活力となって妖精から精霊へ、そして大精霊になれる力を与えてくれるのです！」

「そういえば、城憑きの妖精って具体的に何が出来るんだ？ なんかさっき『大地震』を起こすとか言ったが？」

大地震を起こすって、結構凄くないか？

『本来であれば城の増築や施設や庭や庭園の整備、それに住人たちへの精神的フォローが私の能力になります。』

今はそれに加えて先代城主が残したギミックで『地震を起こす』と『障壁の展開』が可能なのです。

でも、地震を起こすのはそもそもこの城の封印となっている山を安全に崩す為のもので発動は一回こっきり。

障壁の展開は今の私には消耗が大きすぎて1日も展開できるものではないのです。

更に今はあなた方が居るお陰でようやく妖精レベルまで復帰ですが、増築能力はまだ使えないんですよ』

あうーっと涙目で語る妖精さん。

「まあ、とりあえず協力しようか。どうせこれといってやることないし」

「そうですね、それにココを拠点に出来るのは幸いです」

と、言うわけで俺は妖精さんに協力する事になった。

「ところで、さっき何度か封印って言葉が聞こえたけど、どういうこと？」

『あ、それですか？』

この城は先代城主が人間達に国に奇襲をかけられた際に『思い出深いこの場所をアイツらに蹂躪されるのも利用されるのもいやだ!』と仰って大地を隆起させ山のような感じにこの城を覆ってしまわれたのです。

私としてもこの城の住人だった人達と敵対した人たちは嫌だったので構わなかったのですが……。

まさか五千年も封印されっぱなしになるとは思ってもいませんでした。』

「ちょっ!?!五千年も封印されてたのか?!」

出た瞬間に古風あふれる洋風の城の周囲は未来感あふれる建物ばかりの世界、だったら俺は嫌だぞ!?!
いきなり色々職質されそうじゃないか!?!

『あ、その辺は大丈夫ですよ。』

この世界を何度となく本当の意味での魔王が襲撃したり、空から破滅の火が降り注いだりして

何度も人類滅亡寸前にまで陥ってますから』

「ドンだけデンジャラスだよこの世界!?!」

「オーナーの不老不死属性がこんな所でも役に立ちそうですね」

俺の叫びにフブキさんはどこか諦観を込めて呟いた。

いやいや、流石の俺も何度も死ぬのは困るからっ!?!

『まあ、それはともかく早速封印を解きますねー!せやあー!』

妖精さんがなにやら気合を込めて叫ぶのと同時に、その体が強く発光しそして局地的な大地震を引き起こした。

その揺れの強さはきつと震度8ぐらいあるんじゃないかというレベルだ。

「ゆれるゆれるっ! ? つかヤバイぐらい揺れてるし城も軋んでる! ?」

そして俺の不幸センサー（笑）が頭上に何かありと反応した。見上げるとひび割れて今にも落ちてきそうな天井。

「っ！？天井が――」

「オーナー!!!」

何とか離脱を

[illegible]

前略

俺を武装紳士の道へ誘ったネトゲ友達の武装紳士へ

フブキさんとガチで一緒に暮らせるようになったけど、しょっちゅう死ぬ様な生活で少し辛いです。

後、何度も死んでるせいか性欲も落ちてる気がします。
フブキさんと一緒にお風呂して何も反応しないとか男として終わって
るよね。

追伸..

崩れた天井に潰されるのはとても怖かったです。

[illegible]

で、またココからですかい。

俺は前回と同じくキングサイズのベッドで眠っていたようだ。

「はい、おはようございます。オーナー」

「地上か」

長い間くらい洞窟暮らしだったので少し感動だ。

俺たちの戦いはまだ始まったばかりだ……！

『契約を少しも履行しない内に終わらないでください!!!』

「オーナー、本当に始まってすら居ないのに終わらせるのはだめだ
と思いますよ?」

行動記録04…太陽の下に出てゝ先ずはどうする？

あの大地震で俺の残機（数はほぼ無限）が一機減ってからどうやら2時間経過していたようだ。

その間に、フブキさんの手によって城の周辺の探索、妖精さんの手によってライフライン（主に水と温泉）が改めて確保されたようだ。

「この城の周辺は、洞窟の天井が崩れたせいで大いぶ地形が変わっていました。

城の上にも洞窟の天井が落ちたようなんですけど、どうやら結界で殆ど防ぎきったようです」

『前の御主人はなんと言っても魔導王と呼ばれた方でしたからゝ！地脈を利用した防御結界に関しては今でも有功だったみたいですよう。』

具体的に言えば、私たちが出会った部屋に敷いてある魔方陣が結界の要ですゝ』

魔導王すげー。

まさに伝説の人、だな。

内部の天井崩れも防げてれば俺的好感度はグッと上がったのに。

「オーナー、そこまで望むのは少し……」

「愚痴ぐらい言わせてくれよ。毎回死ぬのも結構辛いんだぞ、主にメンタル面で。」

……まあ、それはおいといて、今後の方針を決めるかあ」

そういつて俺が二人を見ると、二人も頷く。

「先ずはオーナーが何をどうしたいか、決めてください」

『人が増える方針ならなおよろしいのですよー!』

まず、俺の目標は元の世界に帰る事だ。

元の世界に戻るには『伝説を作る』『目指せハッピーエンド』もしくは『創造力を高めて自力帰還』だ。

3番目のはどうにもこうにも手詰まりになったときの最終手段だな。とはいえ、そこまで創造力が上がるのか不明だが。

さて、次に俺がこの世界に接するスタイルを決めよう。

まあぶっちゃければコーエーの三国志みたいなS—RPG風に行くか、自分も前に出て戦ったりするA—RPG風に行くか、上から指示を出してひたすら頭を働かせるシムっぽくいくか、だ。

気分的にはシム+S—RPGかな？

俺にアクションは無理だし。

バイオハザードっぽく銃ぶっ放して逃げ惑うのはできるだろうけど、普通に戦いとか無理っぽそうだ。

以前みたたく斬り飛ばされ踏み潰されてグシャツは勘弁だし。

「そういえば、オーナーのステータスや私のステータスに変化って出てるんでしょうか？」

「そーいや気にしてなかったから確認してないな。

ちよつと見てみよう」

カマダ・ヨシヒロ

LP…6200／6200

SP…300／300

CP…46／120

状態…異常なし

運動力…55

知力 .. 75
魅力 .. 55

特殊..

- ・ 不老不死
- ・ 創造の力ユメヲホンモノニ（幻想変換）
- ・ 凶運

「いじめかよっ?!」

以前はただの『強運』だったのに今じゃ『凶運』!?!?
あの時実はちょっと嬉しかったんだぞこんちくしょー!?!?
更に運動力知力魅力の3つが下がってるうー!?!?
ちよ、その二人! 同情の眼差しで俺を見るな!!

「ふ、不幸だー!!!」

俺が一通り悲しんだ後に、フブキさんのステを見る流れになった。
あ、ちなみに俺はもう悲しんでませんよ?
元々切り替えの速さだけは早いのが取り柄なんだ。

フブキ

LP .. 4500 / 4500

SP .. 520 / 520

各種STレベル

攻撃 .. 45

命中 .. 22

回避 .. 55

防御 .. 01

特殊..

- ・ 幻想（神姫）
- ・ 創造力供給
- ・ 情報共有

幻想..

対象に抱かれた幻想を実現する事が可能となる。

幻想（神姫）は人々が抱いた幻想の様に動き、会話し、戦う能力を得る。

他にも人間大のサイズとなって欲しいと言う願望を持つ人もそこそこ多かった影響か、見た目も肉体構造も人間になる機能もある。

その代わり『〇〇は俺の嫁』という幻想は、そもそも『俺』の対象となる人物が多過ぎたので実現対象外となった。

なお、通常モードから武装モードの移行に関しては、神姫がモード変換を意識するかオーナーからの指示があれば一瞬で実行される。ただし、モード変換が一度実行されると戦闘終了までモード変換は実行不可能となる。

創造力供給..

オーナーが持つ創造力（幻想変換対象の維持に使っているCP）を自身のバッテリーとして10時間ほどでフルチャージが可能。フルチャージ状態で丸々10日間行動可能。

人のサイズでの戦闘稼働は1時間につき20%のバッテリー消費が行われる。

情報共有..

Compで得られる情報と神姫が得た情報を共有する事が出来る機能。

マッピング情報、解析情報、言語情報（意思疎通システム）なども含まれる。

遠隔地にいても、オーナーはComp越しで指示を出す事が可能。

「フブキさんは流石にまともだな。フブキさんまでポンコツ化してたら俺マジ泣きするところだったよ」

「そうですね……オーナーの為に、全力でがんばります！」

で、もういっかなーと思っていたら妖精さんも自分のステータスが見たいとダダをこねられた。

「見れるんかなあ……」

『絶対に見たいですー！』

俺はまず、Compのステータスディスプレイの取り説に目を通す。なんだかんだで俺は余り取り説を見ないほうなので知らない機能とか使い方は多いのだ。

「お、あったあった。なるほど、仲間や身内と自分と相手が思っている場合には使用可能か」

『それなら問題ないですねー！』

確かに問題ない。

もう妖精さんは俺判定で身内だからな。

妖精さん(仮)

HP 230 / 230

MP 50 / 50

特殊

- ・整備Lv1
- ・増改築Lv1
- ・結界Lv1
- ・治癒魔法Lv1

整備Lv1..

建物憑きの妖精や精霊がもつスキルのひとつ。

常時建物の劣化部分や破損部分を1日に建物全体から見た1〜2%の範囲で修復を行える。

増改築Lv1..

建物憑きの妖精や精霊がもつスキルのひとつ。

建物の増築や改築をわずかな期間で行えるスキル。

ただし現在のレベルでは、建物内の壁を増やしたり扉を増やしたりが関の山。

結界Lv1..

軽い認識疎外結界。

カンの悪い人は早々辿り着けなくなっている程度。
半径約1?が有効範囲となる。

治癒魔法Lv1..

小さな怪我程度なら一瞬で直せる程度の魔法。

「城憑き妖精すげー」

「そうですね、流石は城憑き……なのでしょうか？」

軽く唾然とする俺とフブキさん。

HPとかMPとか表記が違うのは何故だろうかと思ったが俺は気に

しない。

きっと何かシステムが違うんだろう。

というか、きっと大きな意味は無いに違いない。

ステータスを見終わった後、俺は今後の方針に関して3人で話し合っていた。

「何をするにしても地盤強化が一番大事……なんだけど、どうしたもんか」

地盤強化の要は物、人、金の3つだ。

更に言えば時間も含まれるが今は考慮しない。

「まず、基本の物……この場合は食料、資材、施設といったところか。

施設はともかく、食料は……まあ、問題ないか。」

食料に関してはそもそも問題は無いだろう。

この辺りは動物も多く、食べられる実を作る植物も多いそうだ。

とはいえ、冬に向けた準備はするに越した事はない。

資材……周囲が山で岩が多く、更に山には木も多く生えているのでコレを資材に転用する。

可能なら鉄なども欲しいけど、現状では加工する技術も見つける事も出来ないなので今は放って置く。

施設……要は拠点だな。

それは城があるから特に問題視していない。

それに人が増えた場合は自分たちで増やすもよし、妖精さんに増改築してもらうもよしだ。

「次に人……まあ、この場合は言うまでもないよな」

人が集まるのは何らかの利がある時、あるいは感情を持って動かされたとき、だ。

で、この世界の人間相手に利を見せるにはどうしたら良いか……。ううん、生活の向上？料理で釣る？珍しい技術でSUGEEEE！って思わせる？

そもそもコミュニケーションを取れる自信がありません。

「それに関してはもう少し調べてから考えてはどうでしょうか？」

「それしかないな。とはいえ俺じゃまともに調べるのは無理か……」

「こういう時こそ私にお任せください。忍者型というのは飾りではありませんよ。」

それに黒翼を装備してる状態なら単独での行動範囲はオーナーの想像以上に広く、早いですよ？」

その言葉に俺はそうか、とだけ答えて頭を回転させる。

本音を言えば俺もフブキさんと一緒に行動したいが、正直足手纏い以外のなんでもないだろう。

今必要なのは冷静に状況を攻略する頭だ。

現実をゲーム的に考えるのはゆとり世代の悪い癖でもあると自覚しつつ。

コマは3つ。

低能だがユニットを増加可能な非戦闘向けユニット（俺）

拠点に配置固定の修理補給ユニット（妖精さん）

偵察・情報収集・戦闘と色々活躍可能な万能ユニット（フブキさん）

ここでまず行うべき事は先ほどもあがった様に『情報収集』だな。
俺は先ず、フブキさんが描いてきた地図を簡略化した物を描いて、
エリア毎に分ける。

自分達の拠点エリア、原始人たちの集落、帝国跡の集落、その他エ
リアといった具合にだ。

「フブキさんには先ず、ここのエリアの状況を改めて調べてもらい
たい。

彼らの気質や彼らの行動、こういった行動方針を採っているか…
…といったところかな。

後、人以外にもその土地に何か危険な動物がいるかいないかとか
ね」

俺が指で指し示したのはちょうど拠点エリアのすぐ右隣にある帝国
跡の集落のエリアだ。

「御意」

フブキさんは俺からの指示に今まで以上に真剣な表情で答えを返す。

「妖精さんも全力でお城の修復に力を注いで欲しい」
『言われるまでも無いですよー』

妖精さんはにぱーっと笑顔でそう言って返す。

「俺は『幻想変換』で新しい仲間を増やすつもりだ。
できるだけ、状況に見合った能力を持つ仲間を、ね」
『おぉー新しい住人確保、ですねぇー！』
「どういった人を呼ぶのかとても気になります」

そして次に行うのは俺の能力を使ったユニットの増加だ。

この場合、どういうユニットを増やすべきかを考える必要がある。

一番良いのは万能ユニットの増産だ。

しかし、そんな都合のいいものはそこいらに転がっていない。

「まあ、呼ぶ相手は今から考えるつもりだけど……悪い様にはしないさ」

俺はいつだって楽観的にそう応えるのみだ。

それからしばらくしてフブキさんは黒い翼をはためかせて原始人たちの集落のあるほうへと向かい、妖精さんは城の修復の為に城のあちこちを動き回っている。

俺は自室として割り当てられている『王の寝室』でC o m pから幾つかのフィギュアやプラモ、カードをベッドの上において胡坐を掻いて考え込んでいる。

目の前にあるのは俺の購入した神姫達、蛇の名を持つ老兵と大親分オールドスネーク（ビッグボスM G S P W版）、S Dの超時空の歌姫シエリル、ガンプラ複数、多種類のトレーディングカードゲームか。パッと見て幻想変換の召喚触媒になりそうなのはこんなところだった。

「ココで役立つとすれば、老兵か大親分だけど……」

俺自身に彼らが御せるか？と問えばそれは不可能だ。

正直に言えば器が違いすぎる。

確かに呼べるだろう、だが呼んだ所で御せないのであれば意味は無い。

いや、待てよ……そもそも御する必要があるのか……？

うん、そうする必要性は薄いな。

大親分を呼んで俺を鍛えて貰うってのもありだろう。
ついでに参謀をしてもらうのもアリか。

「幻想^{ユメ}より出でよ、数多の戦場を駆け抜け数多の脅威を駆逐せし戦士よ！我が呼び声に応え、顕現せよ！！」

俺が叫んだ瞬間、強い光がビッグボスのフィギュアから放たれる！

が、その光はシューつと消えてフィギュアはこてんと横に倒れた。
なんでやねーん。

「困った時のCompだのみっと」

Compの画面をみると、メッセージが表示されていた。

『注意…対象はユーザーと相性が悪い為、対象が拒否をしました。』

そのメッセージに全俺が号泣した。
相性が悪いってどういうことさ。

「何故だ、何故なんだ！スネエエエエエエエック！」

その後、不貞寝してから気を取り直して俺は誰を呼ぶか考える事にした。

このままでは多分、老兵も応じてはくれないだろう。

その事実にくぐため息をつきながら老兵と大親分のフィギュアをCompにしまう。

カードゲームのキャラは正直どういうキャラをしているか掴めない
ので保留だな。

次に神姫達に目を向ける。

こちらは……特に問題は無いだろう。

何故一番に呼ばなかったかといえば、女性ばかりの環境は流石に居心地が悪いからだ。

俺はヘタレなので、女性が多い環境は居心地が悪いのだ。

なんというか、動悸が早くなって思考が鈍くなるんだよね。

「ま、考えても仕方あるめえ」

ココで必要なのはそれなりに冷静に状況判断を下し、情報収集や戦闘が出来る人材だ。

残っている神姫のフィギュアは……。

天使型(？)、悪魔型(？)、侍型、建機型、戦闘機型、サンタ型
(赤・青)、クワガタ型、カブト型、箸型、スプーン型、戦乙女型
の姉妹。

……改めてこう見ると、俺って良く訓練された紳士だな！神姫コレクター的な意味で。

心残りがあるとすれば、絶版で入手し損ねた神姫や予算の都合で手を伸ばしていない神姫がいることか。

コレクターとしては残念だ。

ちなみに、紳士友達に俺の嫁宣言した事があるのはフブキさんだけ

だったり。

他はほら、妹っぽかったり、姐さんっぽかったり、そんな感じがしたんだよコレが。

フブキさんはアレだ、バトルロンドから始まって長く相棒を務めてくれてたから余計に親しみを持っている。
一方的にだが。

「さて、誰が良いかなあ本当に」

情報収集の面や機動性を考えると天使型（？）か戦闘機型が一番やりやすいだろうか？

そう考えながら更に考える。

どちらも基本的に頑張り屋でまじめな性格だ。

付け加えるなら……天使型はどっちこという事か……あくまで俺個人の先入観だが。

「それじゃあ戦闘機型を先に呼ぶか」

天使型も良いのだけど、今必要なのは情報収集能力があるメンバーだしな。

「輝け、俺の幻想！^{ユメ}目覚めろ、武装神姫 飛鳥！」

フィギュアから光は放たれ、同時に気配が大きくなっていく。

S i d e F u b u k i

お城を出てから早数時間。

いつの間にか日は沈み夜になっていました。

「この辺りの地形や地質情報もう十分でしょうか？」

私はオーナーのCompから情報を引き出す事を意識し、それを念じると脳裏に周辺の地図情報や地質の情報が表示され、そして頷く。

「あ、オーナーからメールが来てる」

メールを開いて文を読むと頬が緩むのを感じた。

『無理はしないように、怪我はするな、お腹が空いたらキッチンと帰るように。』

色々と書いてあるけれども、要約するとそういう事だった。

オーナーはアレでかなり心配性だ。

臆病だといっても良い。

洞窟探検の時も歩くのはいつもおっかなびっくり。

何度も死んで辛い目にあってるけれど、それでも不屈の根性で何度でも立ち上がって見せてくれる。

そう言った所は私、尊敬しています。

「さて、地形情報はこの辺りで良いとして、次は集落の情報を以前よりも細かく調べましょうか」

その時でした、爆発音が集落の方から聞こえたのは…。

集落の方から炎と煙が立ち上がり、遠くから悲鳴が聞こえてきたのは。

「……っ！」

思考する。

今の任務は情報を得ることだ。

まずは安全な範囲で偵察を、後のことはそのときに判断するべき？

……。

周囲の木々にうまく隠れつつ集落の方へと移動する。

「見えた……あれはっ!？」

目の前に移るのは焼け落ち崩落した集落。

男女問わずに殺され、食われていく姿。

歯向かう者は巨腕を持って叩き潰し、遠くから弓を射、不思議な光で攻撃しようとする者はその口から放たれる強力な火炎ですべからく燃やし尽くす。逃げようとするものは回り込んで掴み、頬張り咀嚼する。

その虐殺を体現する物、その名を。

「ドラ…ゴン……!？」

私は、今どうするべきか……うまく回らなくなり始めた頭で必死にそれだけを考えていた。

行動記録04：太陽の下に出てゝ先ずはどうする？（後書き）

フブキさんー、逃げて逃げてー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5647j/>

とある男と伝説への道～幻想と俺と異世界と～

2010年10月9日22時07分発行